

ハート・オブ・ゴールド



vol. 8

2002年12月9日発行

発行/編集 ハート・オブ・ゴールド事務局
本部 〒701-1213 岡山市西辛川 872-2
T&F 086-284-9700
メール: hearts05@hofg.org

URL: <http://www.hofg.org/>

第7回アンコールワット 国際ハーフマラソン・第2 回青少年レクリエーション 大会、盛大に開催される

世界的な文化遺産アンコールワットを
周回する第7回アンコールワット国際ハ
ーフマラソン2002が12月1日(日)カン
ボジア・シェムリアップ州アンコールワ
ットにて開催されました。カンボジア内
でも最大のスポーツイベントとなり、有
森裕子も第1回大会からランナーとして
参加、大会の運営にも参画しています。

本大会は、「対人地雷被災者に義手・義
足を!そして、水のない人々に井戸を!」
をテーマに掲げ、大会エントリー費用全
額を義足供与事業を展開するNGO及び
NPOに寄付し、犠牲者の社会復帰・自立
を支援するとともに、今年度から井戸の
掘削活動にも支援する事になっています。

また第2回青少年レクリエーション大
会はカンボジア・シェムリアップ州競技
場で11月30日開催されました。

昨年度同様、バレーボール、サッカー、
バスケットボール、レクリエーションの
他、ラジオ体操やフォークダンスの指
導、簡単な健康診断が実施されました。
また、UNFPA(国連人口基金)カンボジ
アの協力により、参加カンボジア中・高
校生を対象にエイズ教育が実施されまし
た。

[詳報次号]



昨年の大会

会員倍增キャンペーン中!



看板を取り付け作業



ついに完成! 日本語教室

チェイ小学校日本語教室完成に寄せて

日本語教師
檜尾 睦

カンボジア王国シェムリアップ州タックビル郡チェイ村のチェイ小学校に日本語教室建築の工事が開始されたのは2002年8月5日。前日は大雨の中、学校関係者・地区住民が多数参加して、建築の安全祈願祭が執り行なわれました。5日の早朝7時から23名のワーカー達による基礎工事の槌音が鳴り響き、工事開始となりました。うだるような暑さの中、玉のような汗を流しながら、ワーカー達は自分の与えられた仕事を黙々としています。時には冗談を言い合ったり、誰かが面白いことを言ったのが笑い声がドットわいたりの明るい現場にほっとしたもの、私はただ一人の日本人。まだまだ意志の疎通が取れません。ハート・オブ・ゴールド現地代表としての責任があります。私の代わりに日本語が堪能な現場監督責任者のボンさんが大工の棟梁のルットさんと工事について色々細かな打ち合わせをしてくれ、ハート・オブ・ゴールドや私の要求や気持ちを伝えてくれました。第一回目の給料を支払う段階ぐらいから徐々にワーカーとの意志の疎通が出来始めました。毎日ボンさんのオートバイに乗って現場に通い、働くワーカー達と同じ場所で、全ての工事の工程を見たことが結果的にはワーカー達と意志の疎通が出来出したのだらうと思います。時にはワーカーが切り傷・擦り傷をすると傷の手当てをしたり、暑さに耐えられず、売りに来たアイスクリームを買って一人一人の現場に差し入れたり小さなことで段々ワーカー達との気持ちが通じている手応えを感じたものです。「ここはこうして欲しい。ああして欲しい。」と色々要求を出しても快く引き受けてくれ出しました。

今回この日本語教室の建築資材すべては木・セメント・タイル・トタン・石・塗料等、釘一本に至るまでボンさんと私とで全て購入しました。シェムリアップの店を色々回りながら、「いいものを安く買おう。」と決めて、毎日予算にとらめっこをしながらの購入でした。そのエネルギーも大変でした。ボンさんの粘り強い交渉には頭が下がりました。途中色々なことが有りましたが、ルットさんを始めワーカー達のエネルギーな労働力で、建築開始から45日目の9月18日午後4時30分、教室備品が全て搬入され、日本語教室がついに完成しました。

ハート・オブ・ゴールドの寄付によるチェイ小学校の日本語教室建築の完成です。どこから見ても、きれいな、可愛らしい日本語教室がついに完成しました。とってもうれしいです。大工の棟梁のルットさんを中心に建築に関わってくれた多くのワーカー達・校長先生・現場監督責任者兼通訳のボンさん 共々大変喜んでます。大きな事故や怪我もなく無事に日本語教室建築が完了したことに安堵し、感謝しています。色々とお気配りをしていただいたり、相談に乗っていただいた事務局の田代さんにも大変感謝しています。この日本語教室建築のためにご寄付いただいた方達のおかげで、念願の日本語教室の完成をみたのは言うまでもありません。

出来上がった日本語教室を少しだけ紹介します。

外観は緑の屋根、クリーム色の壁、茶色のドアと窓枠で出来ており、カンボジアの青い空と木々の緑の中に日本語教室は一段と映えています。とても可愛くきれいな仕上がりになっています。教室・廊下には薄いブルーのタイルが敷かれ、教室にはきれいな二人掛けの机と椅子・教卓と椅子、スチールの戸棚、ホワイトボード、きれいな文字盤の時計、掲示板がきれいに配置されています。玄関周りにはカンボジア彫刻が施してあるクリーム色の欄干が取り付けられ、玄関前にはカンボジアらしいグリーンとブーゲンビリアの花が咲いています。赤いレンガも少し敷きました。玄関の上に目を転じると有森裕子代表が描かれたハート・オブ・ゴールドのかわいらしいロゴマークが微笑んでおり、カンボジア語と日本語で書かれた看板がかかっています。

10月16日より、新しい日本語教室を使った授業を再開しています。11月4日より、新しい日本語のクラスを発足させることが出来ました。30名のフレッシュな子供達が日本語の「あいうえお」から勉強し始めました。きれいな教室に元気のいい子供達の日本語が響き渡っています。昨年から勉強している子供達が毎日手伝いに来てくれ、色々後輩の面倒を見てくれるのは大変うれしい限りです。子供達はこの日本語教室で日本語が勉強できることに感謝するとともに、うれしさを隠し切れないようです。子供達みんな、「有森裕子さんとハート・オブ・ゴールドの皆さん有難うございます。」と言っていますことをお伝えします。

チェイ小学校「睦日本語教室」より、感謝を込めて…。

(2002.11.11)

ハート・オブ・ゴールドでは、多くの会員が必要とされている認定NPO法人をめざして一人の会員が一人を増やす「会員倍增キャンペーン」を行っています。どうぞお知り合いの方で賛同してくださる方を会員にお誘い下さい。よろしくお願いします。



最初は受け入れ3名からスタートしたチャイルド・ケア・センター。2002年には20名に。ハート・オブ・ゴールドはハートチャイルドの受け入れと施設の増設への協力を呼びかけたところ、お父様が亡くなられその香典返しということで寄付を申し出ていただいた方があり、今回増築舎屋が完成しました。

チャイルド・ケア・センター るしな代表 松本 清嗣さん

■チャイルド・ケア・センター設立のきっかけ

「街で子どもたちに物乞いをされてもお金を渡さない自分がいる。たとえば100リエル渡したとしても大きな出費ではないのに、あげない自分。で、自分としてどういう行動をとるか、と考えたら、それがチャイルド・ケア・センターに子どもを引き取ることだった。」このことがセンター設立のきっかけになりました。

街にいる物乞いの子どもたちは、靴や洗濯ものを盗んだり、時には結婚式で盗みをしたりして日々の生活を立てている子もいます。そして、その生活の中に麻薬がはびこっていることもまれではありません。そんな子どもたちを保護しようとチャイルド・ケア・センターのプランは始められましたが、物乞いの子どもたちは施設に入ることを嫌がります。それは施設に入ってしまったら、規則に縛られると考えるからです。街で物乞いをしていれば、ある日は外国人に\$1をほーんともらい、そのお金で好きなものを買ひ、ゲームセンターで遊ぶこともできます。彼らにとっては物乞いの生活の方が、自由気ままに居心地がいいと感じるのかもしれませんが。しかし実際、物乞いの子どもたちの生活では、麻薬、病気、暴力、そして売られるという危険にさらされているのです。身寄りのない子どもたちを放っておくということは、街の物乞いになったり、重労働を課せられたり、いずれにしても、子どもたちを心身ともに危険にさらすこととなるのです。

街の物乞いの子どもたちをきっかけとして設立された、るしなのチャイルド・ケア・センターでは、身寄りがなかったり、エイズや家庭内暴力など家族や自分自身に問題を抱えた農村の子どもたちが、20人仲良く生活しています。みんな明るい笑顔で、たくさん遊び、たくさん働く、元気な子どもたちです。厳しい境遇にあった子どもたちがチャンスを得て、楽しく生活できるということは、本当に素晴らしいことではないでしょうか。

■チャイルド・ケア・センターにおける方針

センターの子どもたちに、カンボジア文化に根ざした教育をすることが基本にあります。そのため子どもたちは村の学校に通っていますし、センターのお母さんの存在であるサレツさんは仏教徒で、クメールの伝統に詳しい方です。またカンボジア文化に根ざした教育は、ケアセンターの子どもたちが伝統舞踊を習っていることからもうかがえます。「伝統文化を学ぶことで、それが自分のアイデンティティにつながり、伝統文化への誇りは、自分の誇りにもつながる。」と松本さんは考えています。ケア・センターの子どもたちに西欧的な自治性を取り入れようかという案もあったらしいのですが、今のところは「クメールはクメールで」というのが方針のようです。

チャイルド・ケア・センター訪問して

ハート・オブ・ゴールドインターン 天野 裕美

バツタンパンの市街から車で20分ほど行くと、るしなの農場とチャイルド・ケア・センターのあるトロス村につきます。私が初めて訪れた時は、ちょうど田植えが終わって、みんなお昼に帰ってきたところでした。泥だらけになった手足を井戸で洗い、元気にお昼を食べていました。

センターでは7歳から19歳まで、20人の子どもたちが暮らしています。初めて会ったときは、すこし恥ずかしがりながら、でもどんな小さな子ども、ちゃんと手を合わせて笑顔で「こんにちは」のあいさつをしてくれました。センターの子どもたちはお行儀がとてもいいです。訪れるたびにしっかりとあいさつに来るし、私がセンターのお母さんの存在であるサレツさんと打ち合わせをしている時、またお昼寝をしている時なども「遊んでほしい」とせがみに来て邪魔することはありません。これは現地スタッフの教育のおかげでしょう。

また、日本からのプレゼントを渡す時も、子どもたちはみんな座り、サレツさんから自分の名前を呼ばれるまでちゃんと待っています。そして手渡された時は、両手をあわせて「ありがとうございます」とべこりとお辞儀をします。ほんとうに行儀がいい！でも手渡された順から鉛筆や定規、Tシャツをひろげ大はしゃぎでしたが…。とにかく、みんなほんとうに嬉しそうでした。センターの子どもたちには、みんな平等にものが配られます。サレツさんがプレゼントを手渡す時も、おやつを配る時も、ちゃんと平等になるように気が配られています。みんないっしょ、みんな平等ということが、また彼らに仲間意識を持たせるのではないのでしょうか。一方もらった子どもたちは、自分のものを仲間うちに分けてあげることをよくします。たとえば、もらったおやつを少しくれたり、また自分のおこずかいで買ったおやつも、近くにいた仲間に分けて一緒に食べたりします。10歳の子が、私にまで小さなおまんじゅうをわけてくれたことは忘れられません。

私は子どもたちにインタビューをしました。何より心に残ったことは、子どもたちのチャイルド・ケア・センターの感想についてです。「ケア・センターの生活は楽しいですか？」という質問に対して、子どもたちの答えは全員「楽しい、幸せ。」です。そしてその主な理由は、「仲間がいること、十分な食事と服があること、勉強ができること。」です。しかし注意したいのは、「十分な食事」とあります。日本で考える「十分」とは違うことです。ある日の1日の食事は、朝食：おかゆ 昼食：うりと鶏肉のすっぱいスープとごはん、夕食：焼き魚とごはん、というように一食一菜が基本でした。食事や服や施設に関しても、日本で考えたら足りないものだらけですが、実際子どもたちは楽しく幸せだと言います。このインタビューを通して、大切なことは、「食事、衣服、遊び仲間、勉強」が揃い、プラス実の親でなくとも自分たちを保護し、見守ってくれる存在がいるというこの環境を子どもの成長に合わせ、維持し続けることだと思いました。



伝統舞踊—発表会

その日、朝から5～6人の男の子たちが、養母サレツさんの指導の下、幕を張って舞台づくりを開始しました。これは新しい衣装をお披露目する伝統舞踊発表会のものでした。まずは女の子たちが楽屋（研修センターの小部屋）で準備を開始します。もちろん男子禁制。ひとりひとり、髪を結ひ、おしろいをたっぷり塗ったお化粧をしてもらいます。それからいよいよ新しい衣装。まずいちばん年上のリエップから、先生が着せていきました。でも最初は、飾り付きの長い衣装をどうやって巻きつけようかと、試行錯誤の繰り返しです。



ようやくリエップの衣装が完成すると、皆一声に「サアート（きれい）！」他の子たちも、お互いを手伝いながら完成していきます。そうすると、もう「サアート、サアート」の嵐で、衣装を着て「サアート」髪飾りを付けて「サアート」、腕輪を付けて「サアート！」とい

った具合です。楽屋は大盛り上がりでした。

メンバーが舞台に出ると、観客一同、美しさに「あー!!」と歓声があがりました。写真撮影はフラッシュが飛び交い、まるで記者会見のようです。そして夕日も落ちた頃、本番が始まりました。まずは伝統的な音楽と共に女の子たちが登場し、歓待の踊り、フラワダンズへと続きます。踊りの立ち居振舞いはもちろんですが、何よりみんなの表情がとても優雅でした。小さい女の子も一人前の踊り子で、観客への笑顔は「おもわず笑ってしまった」のではなく、踊り子としての優雅な微笑みです。恥ずかしさよりも、プロ意識みたいなものを感じました。

『第10回美方残酷マラソン全国大会』

美方残酷マラソン全国大会

実行委員長 久保井洋次

ありのままの自然を楽しみながら、すべてのランナーに「完走の満足感」を感じていただき、町民との肌身に感じる交流をしたい。そんな思いで始まった『美方残酷マラソン全国大会』も、今年で10年を迎えました。皆様のおかげで、また、天候にも恵まれ最高の盛り上がりの中、無事終えることが出来ました。

今年のゲストに、有森さんをお迎えできたのはすごくラッキーでした。1回目からゲストとしてお世話になっている、高石ともやさんと、有森さんのツーショットをどうしてもこの町で実現したくて、数年前よりお願いしていましたが、2年ほど前より、有森さんはその日には、ホノルルで開催される『ハワイアンマラソン』に参加されていて、すっかり諦めムードのなか、「今回はこちらの大会に参加できそう」との知らせを頂きました。但し、体調等の都合により確実ではなく、正直空港にお迎えに行き、姿が見えたときはホッとしました。

中学校体育館での講演会『よるこびを力に』は、小、中学校の生徒をはじめ、高校生、PTA、他町の人たちでいっぱいになりました。決してエリートではなく、むしろ勉強嫌いかなと思わせるようなご自分のことを、あっけらかんとしてしゃべりだす姿に、子供たちはホッとしたりするような笑顔を見せて、彼女の話に引き込まれていった感じでした。とにかく諦めない、くじけない、ひたすら目標に向かっていった彼女の姿勢は、会場をうめた多くの皆さんの心に残ると感じました。質疑応答の時間に、シャイな中学生たちにかかる言葉に、なるほど体育系だな感じました。



Tシャツで国際協力を

有森代表のオリジナルTシャツ

右は、秋田県雄勝町で行われたチャリティスポーツ大会で作られたTシャツで、大変好評でした。500枚以上の注文には、有森裕子がオリジナルデザインをお引き受けいたします。ハート・オブ・ゴールドと皆様のアイデアをミックスして、すてきなTシャツを作りませんか？詳細はご相談ください。



好評

さて、夜には待ちに待った高石さんと、有森さんとの前夜祭が始まりました。このツーショットは全国でも初めてだと思います。『自分を自分で始めてやりたい』の言葉は、実は高石さんから聞いた言葉だった。とか、2度のオリンピックの話等、目的は違っても、共に走ることは極めてきたお二人の話に、600名の参加者は大満足でした。

今回、本来応援だけでという予定だった有森さんでしたが、実は前日の講演会のあと、コースを車で案内させて頂いた時、頂上付近から外へ出て、思わずジーン姿でジョギングをはじめ、「このコースはすばらしい」「明日はここまで走りたい」と言われました。結局13キロ地点のエイドステーションまで走られたのですが、その時、水とスポーツドリンクの配置を見て、「この方がいいですよ」と声をかけて、自らテーブルを持ち上げて移動した様子を教育長が見ておられて、その行動力に驚いたということでした。その後、通り過ぎるランナー達へ給水サービスをして頂き、ゴール会場では表彰式にも参加していただきました。

帰られるとき「また来たい大会です」と言って頂いたときは、やはりうれしかったです。ほんとに楽しい、町が盛り上がった2日間でした。

東日本支部便り

東日本支部リーダー 志澤 公一

【4月から9月まで】

●「霞ヶ浦マラソン」

4月21日(日) (霞ヶ浦市民運動公園にて)

★活動内容: HOGブース設置によるグッズ販売とHOG活動記録写真の展示。

●「カンボジア写真展」同時開催「NYテロ現場写真展」

6月2日(日)から6月30日(日)まで(東京テレコムセンターにて)

★活動内容: カンボジアでのHOG活動記録写真の展示。

(後援: 産経新聞、東京新聞、毎日新聞、読売新聞)

(協力: 東京都、(株)東京レポートセンター、(株)ライツ、(株)リクルート)

(特別協賛: GE Japan)

●「カンボジア写真展」同時開催「NYテロ現場写真展」

9月14日(土)から9月15日(日)まで(埼玉県立川越女子高等学校にて)

★活動内容: カンボジアでのHOG活動記録写真の展示。

(協力: 埼玉県立川越女子高等学校PTA)

※お知らせ

ハート・オブ・ゴールド東日本支部リーダーの志澤公一さんが、このたび「人間力大賞」を受賞されました。おめでとうございます。詳細はホームページをご覧ください。

URL <http://www.jaycee.jp/2002/toyp>

西日本支部便り

ボランティアリーダー 武藤 勝行

「継続は力なり」今年も多くの方達の協力にて車椅子を送ることが出来ました。今後も必要となる必要な物を必要数だけ送る。昨年同様に、再生車椅子をカンボジアに送るプロジェクト報告。前回はアンコール小児病院に再生車椅子を送ったのですが、今回の取り組みは家庭生活(日常生活)で車椅子を必要としている人に車椅子を送るプロジェクトです。

取り組みとして、ハート・オブ・ゴールド現地スタッフとアンコール小児病院が協力、調査し日常生活で車椅子が必要とされる人に送る、必要な人に必要な物を今後も送っていきます。

今回の再生車椅子を送るプロジェクト協力者(団体)を紹介します。

●中古車椅子の提供

川村義肢株式会社、リサイクル可能な車椅子を提供

<http://www.p-supply.co.jp/>

●車椅子メンテナンス(修理、再生)

大阪教育大付属天王寺中・高等学校の技術の先生と生徒が中心となり修理再生を担当

バリアフリー教育ネットワーク <http://www.bfe.gr.jp/>

●大阪外国語大学

今回は再生車椅子を手荷物にてカンボジアに持ち込みました、多くの学生ボランティアの方達に協力して頂きました。

※お知らせ

会員の親睦を兼ねて新年会!(カンボジア報告会)を開催します。

場所 大阪梅田駅前第1ビル12階 神仙閣 TEL06-6341-4071

日時 1月18日(土曜日)13時~16時

会費 基本的に割り勘(3000~4000円程度)

参加者は武藤まで。1月10日までに下記へ。

Fax0721-28-8499 メール katsu-muto@pop02.odn.ne.jp